年間第２６主日

福音朗読　マタイ 21・28-32

2023.10.1　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日の福音のたとえ話では二人の息子が出てまいりました。お父さんから「ぶどう園に行って働きなさい」と言われて、一人は「いやです」と言ったけど、あとで考え直して働きに行った、もう一人は「行きます」と言って、結局行かなかった、ということですね。

勿論、このたとえ話はわたしたちと神様あるいは神様の呼び掛けに対するわたしたちの姿を暗示していると言うことができるでしょう。わたしたちも「ぶどう園で働く」というこの呼び掛けを受けているわけです。それは決して何か修道会に入るとか特別なことだけではなくて、日々の生活の中で他の人との繋がり、関わり方において何かトラブル、問題があったら和解する、あるいは相手を赦すという呼び掛けであったり、他の人に対して自分の愛を分かち合う、持ってるものとか時間とか能力とかいろいろなことを他の人のために使うという、そういう呼び掛け全部を含めて、「主のぶどう畑で働く」ということへの呼び掛けと捉えることができます。

それは、究極にはわたしたちも「イエス様のようになる」という呼び掛けですから、ほんとうは「ここまですればいいだろう」っていうことはないんです。アッシジのフランシスコは――間もなくフランシスコの記念日、１０月４日になりますけど――文字通りイエス様の生き方に倣おうとして持ち物を全部捨て、そして持っている者はすべて他の人に与える。フランシスコは自分たちの兄弟、仲間に対しては、「自分たちを訪ねて来る人にはどんな人にも扉を閉めないように」ということを第一番目のルールにしようとして呼び掛けたと言われています。「じゃあ、泥棒や強盗だったらどうなんですか？」。「それでも扉を開けなさい」というのがフランシスコの徹底した生き方です。

わたしたちがご聖体をミサのたび毎にいただくということは、「そのようにイエス様に倣うというその呼びかけに応えたい、応えます」ということを表明しています。「フランシスコには徹底的に従うことを神様は要求されたけど、まあ、わたしにはそこまでじゃない」とは言えないんです、いろんなことで。

しかし、今日のたとえ話で大切なことは、「従う」と言ながら何もしないっていう２番目の息子のような要素を誰しも持っている、けれどそのことから目を逸らしてはならないということだと思います。

ご聖体というのは、まさにイエス様ご自身の存在であると信じると同時に、その生き方も表しています。イエス様はパンのようなかただった、ご自分の全部を他の人を養うために渡された、ということですが、しかし、わたしたちが「今すぐにそれができない」と思っていることは、「したくない」ということが基本にあるということを率直に認めなければならないと思います。

「こういうことは罪でしょうか？」って時々聞かれることがあります。「誰かを赦すことができないんです。でも、それに当たってはこういう理由があるんです。だから仕方がないですよね？」っていう結論を言って欲しいのかもしれない。あるいは、「ここまで相手のためにすることができないんですけど、それは罪でしょうか？」。「それは罪じゃないんです」って言って欲しい。でも気にはなってるんですよね。イエス様の生き方っていうのはそこまで求められているんじゃないのかなあって、わたしたちは気になっている。「それはイエス様が求めてないんですよ」。「ああ良かった」。そしたら、それで終わってしまうんですよね。

求められている。しかし、「わたしたちはそこまでのことに応えたくありません」と言う自由も神様はわたしたちにお与えになっている、と言ってもいいと思います。わたしたちの信仰生活は神様との対話ですからね。

今すでに全部出来るのか、全部できないのか、ということではない。「自分が今この相手を赦すことができない、完全に与えることができない」。それは、「ことができない」という言い方の中に、少し曖昧にぼかしてしまっている、そういう意図が入っていないだろうか、ほんとにもっと言えば、「赦したくない、与えたくない」っていう自分の気持ちなんです。でもそれを神様の前に率直に表明することを避けるならば、わたしたちが神様との対話のうちに導かれて行くとう信仰の恵みの可能性を閉じてしまうということになると思います。一方では、こんな自分を呼んでくれたんだから、自分はこのままでいいんだ、というふうに開き直ることでもない。あるいは、神様の呼び掛けにもかかわらず自分はイエス様やフランシスコのようにできないということで、恥じ入るのでもない。

全てご存知の、どのような者をお呼びになったかをご存知の神様のあわれみに信頼して、「今これはしたくありません。でももし神様がわたしにそれをすることをお望みならば、「したい」という心の希望をまずお与えください」というふうに率直に祈る。人と人との関係でしたならば、相手が悪い気分にならないよ

うにとか、なにか頼み事とか誘われたりしたときに、口実をもうけて「ああ、その日は忙しいので行けません」とか「今これがあるのでできません」とか口実を設けなくても、神様に対してはその必要はないし、そんなことしても無駄であります。しかし、率直に「今はこれをしたくない。でもお望みならば、どうぞそのように導いてください」という、時間の中で段々にご自分に似る者となるように導びかれる神様の導きに信頼するということは、自分自身の今の在り方を率直に認めると同時に、また、今だけがすべてではない、神様の将来へのお導きにも信頼するということだと思います。

一方で他の人のいろんな模範とか事から倣っていく、参考にしていくということも大事ですけれども、また、「あなたが神様に従うにはこれをしなければならないんです」ということを他の人から規定される、押し付けられるいわれはありません。わたしたちは、どのように今神様に従うかということは自分で神との対話の中で決めていかなければならないんです。「これをすることがあなたにとってキリスト信者の道です。これをすることが、あるいはしなければ、あなたは信者とは言えない」っていうことを他の人から言われる筋合いはないし、そのことを気にしても仕方がないわけです。勿論、参考にしながら、「ああ、自分ももう少しやってみよう。頑張ってみよう」、そういうひとつのきっかけにすることは大切かもしれません。そうでなければ、わたしたちは「あなたはこれをすることが信者の道なんです」ということに操られてしまうことになります。誰も神様から頂いた「自由」という責任をどんな形であれ他の人に預けて良いということにはならないのです。わたしたちは今の自分の状態、今の信仰生活のレベル、と言ったら変ですけども、限界ということを神様の前に正直に認めながら、しかしそんなわたしを呼ばれた神様はわたしたちを導き変えていってくださるんだと、将来への希望のうちに今を歩んで行く、その思いを新たにする必要があるのではないかと思います。

今日もご聖体を通して、「イエスとの一致」というわたしたちの究極の希望を神様のみ前に表明いたします。でも、その希望にふさわしくない自分が今あるとうことを隠す必要はないし、隠すことなく信仰生活の成長の道を歩んで行くための恵みを、今日もごミサを通して願いたいと思います。

---

**ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。**
PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi
**携帯**　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/